

審判講習会 確認テスト

(一財) 茨城陸上競技協会審判委員会

正しいものに○、間違っているものに×を記入しなさい。(問 11 のみ数字を記入)

- 1) 全天候トラックの競技場で行われる大会で、個人所有のスターティング・ブロックを使用したいと持込みがあった。検査の上、使用を認めた。 []
- 2) 4×400mR のスタートで、スターティング・ブロックのフレーム後部が外側のレーンにはみ出てセットされていた。他の競技者のスタートの邪魔になっていなかったの
で、そのままスタートさせた。 []
- 3) スターティング・ブロックのフレームがスタートラインよりも前に出ていたが、フット・プレートはラインより後ろだったので、そのままスタートさせた。 []
- 4) 一旦、リレーのオーダー用紙が提出された後、差替えを求めてきた。締切り時間前だったので、差替えを認めた。 []
- 5) リレーのオーダー用紙提出締切り後、メンバーの一人がケガをしたとして、主催者が任命した医師の診断書を付してメンバー変更の申し出とオーダー用紙の再提出があった。新しいオーダー用紙では最初のオーダー(走る順)とは異なるオーダーになっていたが、これを認めて受理した。 []
- 6) 円盤投げで、選手が回転動作に入った際、片足がサークル外側の両脇の白線後部の地面に触れた後、投てきを行った。外に出た足で踏ん張ってはいなかったの
で、有効試技とした。 []
- 7) 投てき競技の計測に光波測定機を使用する際、競技開始前の動作確認(距離の正確性の確認)を JIS 規格 1 級認証品の鋼鉄製巻尺を使って計測値の確認を行った。 []
- 8) 屋外で行う 4×100mR のテイク・オーバーゾーンは 30m とし、ゾーンの入口から 20m が基準線となる。 []
- 9) 4×100mR で第 3 走者がテイク・オーバーゾーンの入口の線よりも外側(進行方向手前)で待機していた。バトンの受渡し時に、その位置からスタートしたので黄旗を挙げた。 []
- 10) 走高跳で、4 人以上または各競技者の最初の試技の制限時間は 1 分である。 []
- 11) 単独種目の棒高跳で優勝を決めて競技者が一人となり、大会記録に挑戦することになった。制限時間は何分か。 [分]
- 12) 走高跳で優勝を決めて競技者が一人となった。日本選手権の標準記録(大会記録より低い高さ)までバーを上げて挑戦することにしたので、制限時間を 1 分長くした。 []

- 1 3) 走幅跳の選手が競技エリア内に携帯用酸素ボンベを持ち込んでいたので、助力行為にあたるとして競技中の使用を禁止した。 []
- 1 4) 夏の大会で砲丸投を行っている際、コーチ席から選手に帽子を渡したいと申し出があった。審判長は助力にならないとしてこれを認めた。 []
- 1 5) 審判長がやり直しを命じたレースの最初の記録は、失格対象となった選手のものを除いて、有効なものとして記録申請ができる。 []
- 1 6) スタートの際に不適切行為があったとして、スタート審判長がイエローカードを提示した。スタート審判長はその情報を各審判長と記録情報処理員に伝えた。 []
- 1 7) フィールド審判員は一度判定を下したら、その判定を再考することはできない。 []
- 1 8) リレーのマーキングテープを2ヶ所に貼っている選手がいたので、1枚にするように指導したが、聞き入れなかったので監察員が剥がした。 []
- 1 9) 砲丸投のサークル中心部（螺旋釘頭部）が判別しにくかったので、投てき審判員が中心部に炭マグを付着させて競技を行った。審判業務なので問題はない。 []
- 2 0) 走高跳のマークとして、トラック上に炭マグを付着させた選手がいたので、止めさせた。 []
- 2 1) 100m競走で不正スタートの選手に、スタート審判長が「赤カード」を提示した。 []
- 2 2) 中高生の競技会で、教員が技術指導を行いながら審判員を務めていた。 []
- 2 3) 円盤投で、1回目で使用した円盤を次の試技でも使うため、ある選手がベンチの自席に持って行くのを見つけた。円盤は十分な数があったので黙認した。 []
- 2 4) リレーの予選と決勝で出場選手を4名入れ替えることは、2023年4月から国内大会でも適用される。 []
- 2 5) 走高跳で主催者が渡したテープを3つに切り分け、3ヶ所にマークした選手がいた。他の選手の邪魔にならないので、そのまま競技をさせた。 []
- 2 6) 4×100mRの第4コーナーを担当する出発係。スタートの号砲前に各選手に対して「テイクオーバーゾーンの入口の線の手前（スタート側）に立たないこと」と指導した上で準備させた。号砲後、第三走者が近づいてくる際に入口の線の手前に立っている選手を見つけて、正しい位置に立つように注意した。 []
- 2 7) 棒高跳で跳躍者があと一人となった時は、バーの高さやアップライトの調整等跳躍できる準備を整えた後、審判員が選手の希望を聞いた上で試技開始の合図をする。 []
- 2 8) 大学の対校戦 3000m障害で、選手が障害に衝突し、転倒。なかなか動けない様子だったので、近くの審判員が「大丈夫か？」と体に触りながら声をかけた。その後、選手は競技を再開した。 []

- 29) 三段跳で踏切も着地も問題なかった。時間がかかったが、砂場の外に正しく出るまで白旗を挙げなかった。 []
- 30) 4×100mR で、バトンパス時に A チームのバトンが落ちて隣のレーンに転がった。隣のレーンの走り終えた B チームの走者がバトンを拾い、A チームの走者に渡した。A チームの走者はバトンを拾いに行くためにレーンから出た場所に戻り、レースを再開したので問題なしとした。 []
- 31) 走高跳で残り二人が大会新記録に挑戦することになったので、それぞれの試技時間を1分間延長した。 []
- 32) 円盤投で制限時間の1分が経過する直前のタイミングで、投てきのためのターンを開始した。しかし、制限時間内に円盤を投げていなかったため赤旗を挙げた。 []
- 33) 800m競走で、**On your marks** の合図の後、2レーンの選手の左手がグラウンドに触れていた。スタートラインやその前方のグラウンドではなかったため、そのままスタートさせた。 []
- 34) 走幅跳びで9人の選手が競技を開始した。3回終了時点で、そのうちの2人が3回とも無効試技で記録なし。後半の3回の試技 (TOP8) はこの2人を除く、7人で実施した。 []
- 35) 4×100mR で、A チームの第3走者のバトンパスが完了。走り終わった A チームの選手が周囲の安全を確認せずに外側のレーンに移動したところ、後方から走ってきた B チームの選手は、移動した A チームの選手を明らかによけて走った。監察員は審判長に報告し、審判長は走路妨害と判断、A チームを失格とした。 []
- 36) 2019年11月から、国際陸上競技連盟 (IAAF) の名称はワールドアスレックス (WA) に変更された。 []
- 37) 「バトンパスが開始され、渡し手と受け手の両方に触れられている状態ならばどちらが拾ってもかまわない。」 []
- 38) 4×100mR 予選でチームとしてイエローカード、100m予選で個人としてイエローカードが出された選手はイエローカードが累積され失格となり、以後すべての種目に出場することはできない。 []
- 39) 大会初日 4×100mR 予選でチームとしてイエローカード、翌日行われた決勝でチームとして2つめのイエローカードが出されてチームとして失格したが、3日目の走幅跳決勝には出場した。 []
- 40) 大会初日 4×100mR 予選でチームとしてイエローカード、翌日行われた決勝でチームとして2つめのイエローカードが出されてチームとして失格したので、3日目の4×400mR には出場できなかった。 []
- 41) 100m予選と200m予選の2種目でイエローカードが出され失格になった選手は競技会から除外となるので、4×100mR 決勝は他の選手が出場した。 []